

主 題：いちばん優れているのは愛①

聖書箇所：コリント人への手紙第一 13章1-5節

きょう私たちはIコリント13章から学びをしますが、まず12章で学んできた四つの霊的賜物についておさらいしたいと思います。

① すべてのクリスチャンには賜物が与えられている 4節

4節にあったように、すべてのクリスチャンには才能ではなく霊的な賜物が与えられ、主イエス・キリストはご自身のご意思によって異なった賜物を皆さんに与えてくださっている。また、おひとりひとりに複数の賜物が与えられています。

② 賜物は奉仕のために与えられた 5節

二つ目に5節で見たのは、賜物は奉仕のために与えられたものであるということです。どんな賜物をいただいているかを自慢し合うのではなく、私たちは賜物を用いて仕えるのです。4-5節にいろいろな種類があるとありました。あなたに特別な存在として特別な賜物が与えられ、同じ賜物が与えられている人はほかにはいません。あなたはその賜物をいただいた者として、それを用いて仕えることが必要で、我々みんなその賜物を生かして奉仕する者たちです。

③ 奉仕のための力は神が与えてくださる 6節

三つ目は奉仕するための力は神が備えてくださるのだということでした。神様は自分たちの力ですべてのことをしなさいと言っているのではなく、その力は神が与えてくださるのだと。6節に「すべての働きをなさる同じ神」だと、「働き」ということばが出てきました。「働き」というのは活動という意味でした。あなたには賜物が与えられていて、そしてそれを用いて仕えるための力、活動の力も神は備えられている。ということは救いにあずかっているあなたは例外なく神様のお役に立てるということです。あなたは兄弟姉妹の成長に役立つことができるということです。あなたは神様の栄光を現すことができるということです。なぜならそのための力を神があなたに備えてくださるからです。

④ 賜物は教会の益となるため 7節 Iコリント12:7、エペソ4:12

そして四つ目に7節「みな益となるために、おのおの（ひとりひとりに）御霊の現われが与えられている」とあります。賜物というのは自分だけがよければではなく、教会全体にとって益となることが必要だと言うのです。

☆ 愛とはどんなにすぐれたものか

パウロはこうして明確に霊的賜物について教えてくれたわけですが、悲しいことにコリント教会の問題はこういった主の教えを全く無視していたということです。彼らの関心はどのような賜物をどれだけ持っているかでした。ですからパウロはどのような賜物よりも最も価値のあるもの、「愛」についてこの後教えていくのです。

実はこの13章は挿入です。12章の最後は「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。また私は、さらにまさる道を示してあげましょう。」とあります。13:1はそれとつながっていません。14:1「愛を追い求めなさい。また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。」につながっていくのです。ですから、この14:1になって、求めるべき「すぐれた賜物」のことが記されています。パウロはその説明をする前に、「愛」が一体何なのかということの説明しようとするのです。ですから13章を通してその「愛」の説明が記されているのです。

A. 「愛（アガペー）の価値」 1-3節

まず13:1-3にパウロは「愛」の価値を記しています。この「愛」が欠けているのなら、すべてが無価値、価値のないものであると言うのです。1節「たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。」とあります。パウロが言う「愛」は神の「愛」、つまりアガペーの「愛」です。

1. 「言語に勝る」 1節

その神の「愛」について、それはどんな言語にも勝るものであると言います。1節の初めのところに「たとい」と書かれています。仮定法を用いながら事実ではないけれども、もしこうなったとしても、もしこうであったとしてもと、パウロは「愛」の重要性を教えます。

1) 「人の異言」とは何か？

今お読みしたように、パウロ自身が「人の異言や、御使いの異言で話しても」とあります。この「人の異言」や「御使いの異言」とは一体何なのかということです。まずこの「異言」ということばは、“グローサ”というギリシャ語が使われていて、これは舌や言語という意味があります。

ですから「人の異言」というのはさまざまな言語で話をするということです。訳のわからないことばで話す人と解釈する人たちもいますが、そのことはまた14章で見えていきます。まず「人の異言」ということばが明らかにしていることは、人間がしゃべるさまざまな言語、わかりやすく言えば外国語のことです。

2) 「御使いの異言」とは何か？

この「異言」も同じことばが使われています。「御使い」というのは天使だということはいまでもありません。Iコリント4:9や6:3、11:10に同じことばが出てきています。パウロは「御使いの異言」で語ったとしても言うのです。先ほども言ったように同じことばが使われている以上、これは天使たちの言語ということになります。では彼らがどんな言語を話すのか、そのことについて聖書は一切教えていません。皆さんも覚えておられると思いますが、天使が人間たちと話をする時に、天使のことばで話したと記されている箇所はどこにもありません。かえって人間のことばでお話になるから人間はそれを聞いて理解したのです。例えばイエス様がお生まれになる時に、マリヤとヨセフに対してお話しになったそのメッセージを彼らははっきりと正確に理解しました。

3) 愛がないなら

ですからどんな言語なのか我々にはわかりません。ただ言えることは、パウロは仮定法を使いながら、もし例えば私がありとあらゆる外国語を話したとしても、私が天使のことばで語ったとしても、もし「愛」がなければ全く空しいものだ。もし「愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。」と彼は言います。「どら」というのは金属製の円盤を杵につるして、ばちでガンガン鳴らすもの、ゴングです。それがガンガン鳴っていると、心地いいかというとうるさいです。楽器のシンバルもバンバン鳴らしていると、少し静かにしてもらいたいと思う。なぜなら聞く者をイライラさせる雑音にすぎないからです。だからパウロは人がうらやむほどの多くの外国語で話したとしても、またたとえ人が知らない天使のことばを使って話したとしても「愛」はそれらよりもはるかに勝るものであり、価値あるものであるのだと言うのです。

2. 「知識や信仰に勝る」 2節

次に2節に入ると、知識と信仰に比べて「愛」ははるかに勝ると教えます。2節「また、たとい私が預言の賜物を持っており、」と言います。パウロはここで預言者たちのことを話しているのではありません。12:28で、神様が教会をお建てになる時に「使徒」、そして「預言者」と「教師」、こういう人々をギフトとして教会に送り、その人たちが教会の土台を作ってきたということは既に学んできたところです。ここで使われているのは、ここにあった「預言者」ということばではないです。実際原語には「賜物」ということばはないのですが、区別するために訳者がそれをあえてここに記しています。なぜなら「預言者」という賜物はもういませんが、実はこの「預言の賜物」というのは現在も存在しているからです。ですからもしパウロが「預言の賜物」を持っているとしてもと言っているのです。

1) 知識

皆さんにもう一度見ていただきたいのは、「預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、」と書いてあります。まず最初に見ていただきたいのは、「私が預言の賜物を」持ち、「またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ」と、ここに「また」という接続詞がついています。この二つは非常に関連していることです。神の啓示を語る人たち、神の啓示の真理を語る、この「預言の賜物」をもらった人たちは、当然「奥義」や「知識」に通じている必要があります。この「通じ」というのはそれを知っているという意味です。ですから「奥義」についても「知識」についても、そういったものをちゃんと知っているから語れるのです。

ここに書かれてある二つの名詞と一つの形容詞を見てみたいと思います。「奥義」という名詞、「知識」という名詞、そして「あらゆる」という形容詞です。

・「奥義」

これは何かというと、神様が一定の期間人から隠しておられる真理です。ですから「ミステリー」とか「シークレット」と言われるのです。神が私たちに明らかにしようとなさればそれを明らかになさいます。でも例えば教会、つまりユダヤ人と異邦人が一緒にキリストを信じ、一緒にキリストをあがめることは、旧約聖書の時代の人々からすれば知らない話です。ミステリー、「奥義」です。

・「知識」

これは理解するとか、何かに精通するということです。つまり神様の真理を理解すること、神の真理に精通していることです。

・「あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ」

この「あらゆる」という形容詞は、全体にあるすべてのことという意味です。つまり「奥義」の全体のすべてのこと、「知識」の全体にあるすべてのことです。パウロが言いたいのは、もしパウロ自身が神が既に明らかにされた「奥義」だけではなくて、まだ明らかにされていない「奥義」のすべてを知っていたとしても、また真理のすべてのことを知っていたとしても、もし「愛」がなければ何の値打ちもないということを使うのです。

2) 信仰

続けて見ていくと、今度は「信仰」の話に移っています。「また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても」と書かれています。ここで使われている「信仰」というのは、「信仰」の賜物のことです。私たちはみんな「信仰」を持っています。私たちはみんな主を信頼しています。でも「信仰」の賜物というのは特別に神様を信頼する賜物のことです。何があろうと揺るがない主への信頼のことです。ここには「完全な信仰」と書いてあります。「完全な」というのは先ほど見た「あらゆる」という形容詞と全く同じことばです。ですからパウロが言いたいことはまさに「完全な信仰」なのです。凡人である私たちの信仰をはるかに超えた「信仰」とでも言えるでしょうか？たとえそういう「信仰」を持っていたとしても、「愛」がないのだったらその「信仰」は何の値打ちもないというのがパウロのメッセージです。

今まで私たちが見てきたことを思い出してください。パウロはたくさんの外国語で話すような、また御使いのことばを話すような、それだけ聞くだけでもすごい人だと人からの賞賛を絶対得ることができますよね？例えば本当にすごい「知識」を持っている、「奥義」のすべてを知っているし、神様の真理を完全に知っている。また「信仰」においても「山を動かすほどの……信仰」と。私たちみんなが褒めまつりたいたいようなそういう人がいたらと、あくまで仮定法で言っているのです。例えば人がうらやむようなこういう信仰者であったとしても、「愛がないなら」、つまり「愛」を持って行っていないのなら、すべてのことは空しいと。ですから人間がうらやむような最高峰の信仰者を表して、その信仰者においても「愛」がないのだったら全く空しいと教えるのです。つまり我々にとって最も大切なことは「愛」なのだということです。「愛」が動機なのかどうか、私たちの信仰者としての歩みのすべてが、「愛」を動機として行っているのかどうかを問うてくれているのです。

3. 「慈善や犠牲に勝る」 3節

1) 慈善 マタイ6：2

3節を見ると「また、たとえ私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え」とあります。慈善の話です。感謝なこと、私たちの群れの中にも人々の必要を知ってその必要に喜んでこたえてくださっている人たちがおられることを知っています。間違いなくそういう皆さんは彼らに対する「愛」がそういった行為を生み出しているのでしょう。すばらしい話です。しかし、よく見ていただくと、もし「私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え」と、ここでパウロが言っているのは慈善でもちょっと桁外れの慈善の話です。自分の持っている物を全部売り払って、それを全部そういう人たちに分け与えと。もし私たちがそういうことをしたら恐らく最大級の賛辞を受けるでしょう。なぜなら普通の人はそういうことはできないからです。しかし、パウロはそのような比類なき慈善でも「愛がなければ、何の役にも立」たないのだと教えたのです。

イエス様が山上の説教の中で施しに関してお話になったのですが、「だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。」(マタイ6：2)、自分のしていることをみんなに知らしめるような、「ねえ、ねえ見てください。私はこんなすごいことをしているんですよ」というような行為は神の前に全く価値のないものだということを教えています。同じことです。どんなにすばらしい慈善の行為であったとしても、それがあなたの主に対する「愛」から生まれていないのであれば全く空しいと。

2) 犠牲

3節の後半は「また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。」と犠牲の話に移ります。実際パウロ自身は殉教していきます。だから信仰のために私が自分のからだを「焼かれるために」差し出したとしても、その行為が主に対する「愛」を動機としていないのであれば全く空しいと言うのです。

3) 愛がないなら：

パウロが言いたいことがおわかりになったと思います。我々が考えなければいけないのは、私たちがなすすべてのことを一体どういう動機で行っているのかということです。もちろんこういうことをすれば、人が喜んでくれると思ってすることが間違っていると言っているのではない。でも私たちが考えなければいけないのは、主が喜んでおられるかどうかです。なぜならあなたも私も間違いなくその主の前に立つのです。そして主はみことばを通して私たちにどのようにあるべきなのか、どのように生きるべ

きなのかを教えてください。そのように生きているかどうかが問題なのです。

パウロはこうして1-3節を通して「愛」というのがどんなものよりもすぐれていることを教えます。恐らくこれを聞いたコリントの人たちは驚いたでしょう。なぜかという、初めにお話ししたように、彼らはどんな賜物を持っているのか、どれくらい持っているのかに関心があったからです。パウロはそんなことよりも「愛」が重要だということを教えたのです。そしてそれこそ今の私たちが耳を傾けなければいけないメッセージそのものです。

B. 「愛（アガペー）の実体」 4-7節 Iヨハネ3：16-18、ローマ5：5、ガラテヤ2：20

レジメに「愛」、あえて「アガペー」と書きました。神様の「愛」だからです。人間の愛の話をしているのではない。神の「愛」について、その実体です。なぜそんな書き方をしたのかを今から説明していきます。

4-7節を見ると、神様の「愛」（アガペー）の完全な描写というものを15個見ることが出来ます。注意すべきなのは、パウロは神様の「愛」とはこういうものですよということを持たず定義しようとしたのではなかったということです。もしそうだとすれば、彼はここで名詞を使ったでしょう。実はこの15の説明に名詞は使われていないのです。使われているのは全部動詞です。つまり神様の「愛」（アガペー）とは行動が伴ったものであり、行動がなければその「愛」ではないからです。実はそのことをヨハネも教えてくれています。Iヨハネ3：16に「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。」とあります。説明するまでもありませんけれども、我々が本当に愛されているというのがどうやってわかるかということ、イエス様がそういうおことばをかけてくださったからではなくて、イエス様が十字架に架かってくださったという行動があなたや私がこの神によって愛されていることを確信させるのです。我々はイエス様のおことばをただ聞いたのではない。イエス様が行動してくださったのです。あなたや私の罪を負って十字架で死んでくださった。その犠牲を見た時に、私たちは確かにこんな私のような者が愛されていることに気づいたのです。

だからヨハネは「ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」と言うのです。主がそのように行動で「愛」を示してくださったのなら、私たちも行動で示すことだと。こう続きます。「世の富を持ちながら、」、2017年版では「この世の財を持ちながら」ですが、「自分の兄弟が困っているのを見て、その人に対してあわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか。」と。そのとおりです。

今私たちが見てきたのは、アガペーという神の「愛」についてです。神様の「愛」というのはことばではなくてそこに行動が伴っていた、そう見てきました。そして主は私たちにも同じように行動しなさいと言うのです。なぜかという、そのアガペーの「愛」、神の「愛」があなたや私に与えられているからです。パウロはローマ5：5で「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているから」と言っています。つまりクリスチャンというのは神の「愛」を知っただけではないのです。神の「愛」をいただいた者たちだということです。私たちは神の愛をいただいたのです。パウロはガラテヤ2：20で「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」、クリスチャンというのは聖霊なる神様が内住して下さっていると教えます。確かにみことばを見ると、父なる神も子なる神であるイエス様も私たちのうちにいてくださる、神である方が、「愛」である神様が私たちのうちにいてくださると書かれています。生まれながらの私たちに、この神の「愛」をもって誰かを愛するとか、行動することは絶対にできなかったのです。でも神の「愛」をいただいた私たちは、それを心の中にいただいているゆえにそのような行動をなすことが可能となったということです。でなければ、この命令は我々にとって重荷でしょう？

パウロはこの後、「愛」とはどのように行動するものなのかを明確にすることによって、コリント教会だけではなく、私たちの実践の助けになることを目的に「愛」の詳細を記してくれたのです。「愛」とはこのように行動するものだ。そしてそれを知った私たちはそのように歩いていきなさいと。多くのリストの中で、多くの皆さんはもう既にそういった歩みをなしておられると思います。でもしっかりとこの「愛」が生み出す15の行いを見て、そのような歩みをなす信仰者に変えられることが私の望むことです。

1. 「寛容」 4節

4節「愛は寛容であり」と書かれています。まず一つ目は「寛容」ということです。これは忍耐を強く持つとか辛抱強いという意味です。この忍耐や寛容というのはあなたの周りの人々に対するものです。実はこのことばは短気ということばの反対の意味です。すぐに激昂してしまうような、怒ってしまうような、その反対です。パークレーという神学者は「4世紀の神学者であったクリソストムによれば、

それは他人から不当な扱いを受け、これに対して復讐しようと思えば簡単にできるのだが、あえてそれをしない。そういう人間について用いられることばである。」と説明しています。

ここでパウロが教える「寛容」な人というのは、人から言われたことやされたこと、そういう嫌なことをずーっと心の中に秘めておいて耐えていきなさい、そういうことではありません。もしそういうことをしたとしたら、もう経験されているようにいつか爆発します。一生懸命そういうことを忘れようとしても、残念ながら我々の不完全な記憶はちゃんととどめてくれます。忘れることはできません。ではどうしたら我々は勝利できるかというと、私たちは悪に対して悪で応じるのではないのです。善をもって応じるのです。それが唯一の勝利の方法です。なぜかというと、あなたが人の悪に対して善で応じるならば、あなた自身の心から喜びがなくなるからです。でも残念ながら私たちは自分の怒りに任せてしまって、すばらしい祝福を失ってしまう、そういう弱さを持っています。

「愛は寛容」だとパウロは言います。つまりどのような悪に対しても、どのような人からの不当な扱いに対しても、その中にあって神に喜ばれることを選択するのです。「愛」は報復をしないのです。人の悪に対して仕返しをしないのです。もしそれを思っているのなら、もうあなたは神の前に間違った選択をしているのです。ぜひやってみてください。その時に神があなたの心の中に働かれるから。「どうか神様、忘れさせてください」ではない、「神様、どうかその中にあってあなたが喜ばれることをさせてください」なのです。もちろんそれを私たちが心の中で固く決めたとしても、実際に行動に出るためには勇気が要ります。でもあなたが本当に主に助けを求めながらそれを実践していくならば、神様はあなたを通して働かれる。そして何よりもそれに状況に打ち勝つのです。

2. 「親切」 4節 マタイ5：40-41

二つ目は「愛は親切」だと出てきています。「親切」というのは情深くあるとか慈悲深くある、人の役に立つ、仕えるという意味を持ったことばです。ですからどんな人に対しても、先ほど見た「寛容」とよく似ていますが、「親切」で善意を持って応じていこうとすることです。悪に対して悪で応じるのではないのです。逆に私たちはその人にとってよかれと思うことを選択しようとするのです。もし自分のことだけ考えたら、愛する自分をこんなに傷つけたんだから、何かをもって仕返しをしてなんて思ってしまいがちです。でもその人のことを考えたらそういうことをしない。だから「親切」というのはまさにどんな人に対しても善意を持って、その人にとってよいと思うことを行っていくことであると。ちょうどイエス様が「あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。あなたに一ミリオン行けと強いるような者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい。」（マタイ5：40-41）と言われました。「一ミリオン」というのは1.5キロです。そこに行くようにと「強いるような者」には逆にその倍行きなさいと。普通だったらなぜそんなことを強えられるのかと不満を述べてみたいように思うのですが、そのように言うのだったら、その倍してあげよう、それが「親切」だと。

皆さん、お気づきになりますか？この二つを見ただけでも、そこに自分というのがないのです。何を考えているのかというと、主が喜ばれることをしたいのです。そして自分のことよりもその人たちのために。何が原因で悪いことを言ったのかよくわかりません。でもその人たちのことを考えて、私たちはその中にあって主が喜ばれることを選択し、そしてそういう人たちに対して役に立つこと、その人たちに対しても「親切」であるようにと、「愛」とはそういうものだと言うのです。

3. 「人をねたみません」 4節

三つ目は「人をねたみません」と出てきます。この「ねた」むということばは悪い意味で熱心だということばです。いい意味ではありません。どんな意味で熱心なのかというと、人の持ち物に対して自分が持っていないことに関して熱心にそれを得ようとするということばです。なぜあの人がある物を持っているの？なぜ私が持っていない物をあの方は持っているの？そしてそれを何とか自分の物にしようと努めるのです。パークレー師はねたみには二種類あると言います。一つは他人の持ち物をうらやむことでこれを避けることは大変困難であると。いい物を持っているとか、なぜあんないい物を持っているの。残念ながら私たちはそういううらやみの心を持つことを避けることは非常に難しいと。何度も経験してきましたよね？彼はこう言います。「この種のねたみは非常に人間的な感情であるからだ」と。

もう一つはもっと悪質で、自分の持っていない物を他人が持っているという事実そのものをうらやむというねたみです。物自体を欲しがるとしても、他人がそれを持っていないことを願う、なぜあの方は持っているの？なくしたらいいのに、壊れたらいいのに、そういったことばです。自分が持っていない物を人が持っているならば、それを欲しいと思うだけではない、それをなくしてしまえばいいと思うのです。ですからねたみを持っている時に注意していないと、人が持っている物をその人がなくなったら、心の中でほくそ笑んだりする。

ですから、人をねたまないというのは人々の成功や幸せに対してそれをひがんだり、悪意を持って見たりすることをせず、かえってそれを喜ぶのです。自分が持っていないものをその人は得ることができた、すばらしいねと喜ぶことだと。それが人をねたまないということだと言うのです。

4. 「自慢せず」 4節 ピリピ3：8、ガラテヤ6：14

四つ目は「愛は自慢せず」と続きます。これは自分自身を過度に褒めることです。自分が人々に比べて勝っていると思って、人々が自分にねたみを抱くように願うのです。つまり自分を自慢することによって、みんなが「いや、この人はすばらしいね、こんな人になりたいね」と思うことを願う、まさにそういった思いが、この自慢をするということです。もちろんここには「自慢せず」と否定で書いてあります。悲しいことに私たちは、誇ることにない私たちを誇ってしまうのです。バークレー師はこう言います。「愛には自己没却な性質がある」と。自分を捨てるということです。「真の愛は常に己の価値よりも己の無価値さを遥かに強く意識するものである」と。「真に愛する人は自分が愛されていることのすばらしさを忘れることができない。愛は愛する人に十分だと言える贈り物を決して与えることができないという意識によって絶えずへりくだらされるものである」と。「愛」は自分がいかに価値のないものなのかということをはっきりと明らかにしてくれるのです。

例えば今彼が言ったように、私たちが例えば誰かに愛を示そうとしても、その示せる愛は不完全です。私たちの生活の中で本当に自分自身が嫌になってしまうことがありますか？願っていないながら、なぜこんなことができないのだろうと。赦すことにしても、私たちは赦された者なのになかなか人を赦すことができないでいる。愛することも自分は愛されていないながら、私たちは愛することができないでいる。気づきませんか？いかに自分が不完全なのか。「愛」というのは自慢せずと、「愛」というのは感謝なことに自分がいかに不完全な者であることを明らかにしてくれる。だから私たちは自分など自慢できないのです。あなたは一体自分の何を自慢しようとしていますか？何か自慢できることがありますか？例えば私たちは過去にこんな働きをした、こういうところで宣教したと言うかもしれない。でもそれはすべて神様の恵みにすぎません。神がなさったみわざをあたかも自分の手柄のように考えて、自分を誇っているのです。私たちがこうして生きていること自体、神の恵みそのものです。いろいろな働きを神様がさせてくださったら、それは神の恵みなのです。神がそのように使ってくださいにすぎない。それは自分を褒めるためではないし、誇るためではありません。だから私たちは間違っているのです。ここにあるように「愛」は自慢しないのです。それは自分が何一つとして自慢できないからです。なぜなら我々が自慢する時に誰が聞いていますか？話している人も聞いていますでしょうけれども、同時にあなたのことを誰よりも知っている神が聞いておられるのです。

「愛」というのは、人間的ないろいろなことを自慢し合うことではないのです。みことばが言うように、自慢しないことです。それは自慢してはいけないと言っているのではないのです。あなたは自分自身のことをよく知れば、本当の価値が何かを知れば、今まで自慢していたことがいかに空しいか、そのことに気づくのです。パウロには生まれにしても、民族にしても、受けた教育にしても、ローマ市民権を持っていたことも、社会的な特権にしても、ありとあらゆることを見た時に、すべての人々がうらやむような、自慢できることがいっぱいありました。彼はかつてそういったものを誇っていた、得だと思っていた。ところがピリピ3：8で「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思ってい」と言っています。今まで宝だと思っていた、今まで全部自慢できることだ、そしてみんなもそれを知ってすごいねと言っていたけれども、パウロは主を知った後、それがすべて空しいものだと思うようになったと。私たちが一番誇るべきものはこんな私たちを救ってくださった主なのです。この方だけが私たちの誇りであると、だからパウロはガラテヤ6：14に「私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。」と言っています。我々は地上でどんなに賞賛に値するものを手に入れたとしても、この世を去る時にはみんなこの世に置いていくのです。問題はその後どこに行くかです。どこで永遠を過ごすかです。私たちにとって最も価値あるものは何かというと、イエス様であり、我々が自慢できるのは、また自慢すべきなのは私たちを救ってくださったこのすばらしい主であると。

5. 「高慢になりません」 5節 箴言29：23、マタイ11：29、ピリピ2：3-8、マタイ23：12（ルカ14：11、18：14）

続けて彼は5節「高慢になりません」と言います。この「高慢」というのは膨れさせるとか高ぶらせる、誇らせる、プライドで思い上がったとか、うぬぼれたとか、横柄な態度や言葉、そういった意味のあることばです。悲しいことに、今見てきたように、いろいろなものを自慢する私たち。その人の心の中にはいろいろなプライドが存在しています。先ほどもお話したように、私たちが覚えなければいけないのは、では神がそれをどのようにお思いになるのかです。ソロモンが箴言29：23で「人の高ぶりはその人を低くし、心の低い人（謙った人）は誉れをつかむ。」と言っています。旧約聖書も新約聖書も

同じことを我々に教えます。そのプライドの高い人、神がその人を低くされると。この世のいろいろなものを誇っていたら、神の前に立った時にそれがいかに空しいものであったかに気づかされます。愛は高慢にならないと。

イエス様のことを思い出していただくと、イエス様が地上にいた時に、もし、仮定法で言うならイエス様はいろいろなことを自慢することができたでしょう？なぜならイエス様は神です。イエス様は救い主です。いろいろなことを自慢することができたにもかかわらず、彼はそういったことを自慢したり、高慢なプライドにあふれた人間だったのか——。イエス様自身が「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」と言っておられます。最も自慢すべきお方、その権利をお持ちの方が私たち以上にへりくだったのです。恐らく皆さんも気づいておられると思いますが、この「愛」のリストを見た時に、間違いなくこのアガペーの「愛」を持って完全に生きた人はイエス様です。ここに見るリストというのは、間違いなくイエス様の生きざまを私たちに示してくださっています。イエス様はご自分を自慢することもなかったし、高慢にあふれた、プライドに満ちあふれた人でもなかった。最もへりくだったお方でした。パウロはこう言います。「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」と。そこに私たちの大きな問題があります。自分よりも人の方が勝っていると思うのは私たちはなかなかできない。でもみことばは「愛」は高慢にならないと言います。

恐らく主イエス・キリストの救いにあずかった私たちが、神様の恵みによって日々自分自身の本当の姿を示されていくなればへりくだらなければならないというのではなくて、一体私の何を自慢しようとしているのか、何を誇ろうとしているのかと思うはずです。今まで人として築き上げてきた実績なのか、私自身の学歴なのか。そうではなくて、こんな私にこんな「愛」を持って、こんな恵みを持って接してくださり罪の赦しを与えてくださったこの神だけだと。しかもその方が常にあなたや私とともにいて私たちの考えることも思うことも、口に出すことも全部ご存じだと。そのことを知っていたら、私たちが誰かを見下している時に心が責められませんか？一体あなたは自分を誰だと思っているのかと。イエス様はこう言われました。「だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。」と。私たちは自分を高くしようとするのです。人々よりもすぐれている者と見せようとするのです。信じ込ませようとするのです。神があなたを低くしてくださると。「愛」というのは高慢にならないと。まさにそういう人々はへりくだって、人々に仕える者たちだと。

6. 「礼儀に反することをせず」 5節

最後に5節「礼儀に反することをせず」とあります。この「礼儀に反する」というのは無作法とか失礼な振る舞いをするということ。無礼とかぞんざいに振る舞うとか、ぞんざいに答えるという意味があることばです。もちろん兄弟姉妹たちにだけではなく、この世のすべての人々に対する私たちの態度の話です。皆さんの職場の人々やご近所の人々、家を訪れる宅配の人かもしれないし、我々が出会うすべての人々に対する態度を教えるのです。みことばは「愛」というのは、彼らに対して失礼な態度で接することがないということ。予期しなかった人と道で出会ってお話しするとか、家に宅配便が来るとか、いろいろな形で私たちは教会以外の人たちと接することがあります。そういう機会を我々はどんなふうにとらえているかです。一体私たちの中のどれぐらいの人が、まさにそれは10秒かもしれないし、30秒かもしれない。そこで30分説教することはできないでしょうが、それが願わくばキリストのすばらしさを伝える機会でありたいと、そんなふう祈りを持って接している人がどれぐらいいるでしょう。

「愛」というのは礼儀に反することをしない。どんな世界であっても、我々は主イエス・キリストを信じ、この神の「愛」をいただいている者として、正しい態度をもって彼らと接するのです。ジョン・マッカーサー先生は「多くのクリスチャンが無礼、礼儀に外れることによって未信者への証しの機会を失っている」と言っています。もし私たちが地の塩だと言うのだったら、地の塩として一体いつ働くのですか？私たちがキリストの福音を伝えると言うのであれば、一体いつ我々はキリストの福音を語るのでしょうか？少なくとも私たちはピンポンが鳴って外に出て行く時に、それが荷物を運んでくれた人だったら、「主よ、どうか一言かもしれない、でもそのことばが願わくばこの人に永遠への渇きを与えてくれるように。神様、あなたへの渇きをもたらずように」と。もし我々クリスチャンがそういう思いを持って教会外の人たちと接したら変わってくると思いませんか？不自然な形で言っているのではないのです。我々はその人たちに救いをぜひ受けたいからです。皆さん、思い出してください。神様が私たちに救いを備えてくださった。その救いを備えてくださった対象というのはすべて例外なく全員が神に逆らう罪人たちでした。神が私たちに憐れみを示してくださらなければ、私たちは今この救いをエンジョイしていることはありません。今私たちが死んでも天に行けるのだと希望を持って生きているのは神が憐れんでくださったからです。だとしたら私たちもいろいろな人たちと接する時に、予期して

なかったかもしれないけれども、我々はその時祈れるのです。主よ、どうかこのわずかな挨拶がこのわずかな機会があなたのすばらしさを伝えることができる、そんな機会となるようにと。わずかな機会かもしれない。我々からしたらこんなあいさつが、こんなわずかなことばがどんな影響を及ぼすのだろうと思うかもしれない。私はそれを経験した人間です。私が教会に入ったのは“こんにちは”というあいさつのことばでした。そのことばを聞いた時に、この人は私の持っていない何かを持っていると。説教を聞いたのではない。主を愛する人のあいさつによって、ここに入るべきだと。主はいろいろな形で私たちのうちに働かれました。同じように人々の心の中にも働かれる。「愛」というのは礼儀に反することをしない。あのクリスチャンはあれでもクリスチャンなの？この教会はこれでも神を信じている教会なの？と。そんなメッセージを発しているとしたら、私たちは主に心から謝罪しなければいけない。「愛」というのは礼儀に反することをしない。その責任は我々ひとりひとりが考えなければいけないことです。

この後まだリストが続いていきます。それは次回私たちがともに集まった時にご一緒に見ていきましょう。でも少なくとも今私たちが学んできたことをどうか皆さんしっかりと反芻して、そして皆さんが「主よ、私はこんなふうに生きていきたい、なぜならあなたの愛をいただいた者として愛を下さったあなたを伝えていきたい」、その祈りをもって、その願いを持って主に助けを求め、新しい一週間を歩んでくださることを願います。